塩水化の影響について，従来地下水位の異常低下と塩水の浸入に関して地質的観点から予測がなされていたが，今回の調査で水質との関連から，地下水位低下は塩水化の現象と結びついていることを明らかにした。

集落地域の汚染に関しては，これまで役場を中心とした地点の汚染が指摘されていたが，その地下水の流入過程を考えると，単に地点ごとの問題ではなく，集落全体としての汚染であることが明らかとなった。

以上の通り考察してきた地下水の現況をもとに，新島における今後の水資源開発を考えた(第5章)。第一に，偏在的でない水源からの取水により，今後の水供給量の増大も可能であること，第二に，集落内の地下水汚染対策は，本村地区全体のものとして考えねばならないこと，第三に，本来新島の観光は自然をベースにしたものであることを考えると，その自然を維持する為にも，数による観光客の増加ではなく，観光地として質の向上を目指すべきであることの3点である。

本調査の結果が，新島における今後の水資源開発・水利用のあり方への1つの指針となることを願う。

＊本地域では，ヘルツベルグ(Herzberg)の法則が成立していると考えられるから，この理論からすると地下水位がマイナス値になると塩水が浸入することになる。

中山道望月宿の宿駅構造と変貌

室　伏　朝　子

(1)　目標・方法

本研究は中山道望月宿を対象地域としてそこにおける集落，道路，交通の関わりを明らかにすることを目標とした。研究にあたっては景観，形態は機能，構造を反映するという観点に立って，特に景観，形態に重点を置きそれらの歴史的推移及び空間的展開を把握しようと努めた。なお基本的知識を文献等により身につけた上で，実地調査即ち観察，聴取，現地の文献的史料の調査等を中心に本研究を進めていった。

(2)　構　　成

本論は3章から成る。1章は「信濃の街道と宿場」と題してまず信濃の交通路を概観し，さらに中山道信濃路の宿の地域的特色を捉えその中における望月の交通的位置を明らかにしようとした。2章は本論の中心となり「中山道望月宿の構造と変遷」として，望月宿を様々な面から詳細に分析していった。さらに3章では，宿が廃されて明治以降の諸条件の変化に伴い旧望月宿がどのようにその形態，機能を変えていったかを「明治以降の望月の変容」としてみていった。

(3)　要　　約

①信濃の幹線交通路は古代より現代に至るまで，大局的にはほぼ同じルートを踏襲してきたと言える。しかしその中で，信濃の東西を隔てる中部山岳地帯には幾筋かの峠道があって，時代によりその地位の変遷(動)がみられる。それはこの地帯が，古来東西の要地を結ぶ通過交通の場であることに起因し

ていると思われる。

②望月はこの中部山岳地帯を横断する中山道の宿で，近世初頭中山道の開通に伴い新設された集落である。峠越を控えて栄えた東の碓水峠，西の和田峠麓の宿の中間に位置し，宿泊機能の低い仲継通過地的な宿で，人口，戸数も中山道で最も少ない部類に属した。

③望月は蓼科山北麓の鹿曲川河畔に，17世紀初頭に宿つくりが始められ，中頃には宿（本町）はその形態を整え，川向うに新町が形成されたと考えられる。ところが18世紀中頃洪水により新町は流亡し，本町続きに移された。しかし，この頃が宿としては最も繁栄した時期と考えられ，その後は衰退化の方向をたどり，飢饉や天災が拍車をかけ人口は減少し，宿は窮乏していった。

④明治に入り宿は廃され，望月宿はその機能を失うが，鉄道からはずれた同地域の交通の中心として発展する。特に蚕糸業の発達で周辺の蚕糸の集散地となり，それに伴い遊興的性格をもつ商業地として，大正から昭和の初期に繁栄をみる。しかし昭和恐慌以後蚕糸業は衰退し戦時体制に入ると町の繁栄も絶たれる。

⑤明治以降，町はまず旧宿を中心に発展していく。旧宿一帯はその形態を維持し長らく町の中心となっていたが，町の拡大に伴い次第に諸機能は新しい市街地に移り，相対的に旧宿の町における地位は低下していった。新道は旧宿を避けるように建設されていき，漸次旧宿が道路から取残される形になってきている。

⑥旧宿一帯の宅地割は宿時代と殆ど変わらず，沿道の家のつくり等にも往時の面影をたどることができる。しかし近年，町並は変貌の速度を早めている。現在の旧宿一帯は新旧家屋が混在し宅地外利用も見られ，又空地や空家も所々にあり，家屋が通りに沿って軒を連ねる宿場町の町並形態は崩れ始めている。道路との接触から生まれ，道路との関係によって維持されてきた旧宿一帯は，現在では道路との関係を絶たれ，その持続力を失いつつあるように思われる。

かかるように，旧中山道の宿望月はその発生から今日に至るまで道路交通と不可分な集落で，交通の変化に伴いその機能，形態を変化させてきたと言えよう。

立山山麓の宿坊村芦峅（くら）寺の集落機能変化

安　川　彩　子

「特殊な性格をもった集落が，その根本となす特殊性を失ったとき，その機能はどのように変化していくのか」というのが私の研究のテーマである。芦峅寺は，立山信仰登山の宿坊村として江戸時代に全盛期を迎えたが，明治維新の際の廃仏毀釈により，その根本を失うことになった。宿坊村という形が整っていた集落が，これを契機にどのように解体し，その集落機能はどのように変化していくか探ろうというものである。

第１章では，芦峅寺の成立の背景となった立山山岳地域の地形を概説し，第２章は立山信仰と芦峅寺の関連，第３章では明治以後の芦峅寺をとりまく社会環境の変化のうち，特に大きな影響を与えたと思われる①廃仏毀釈，②近代登山の勃興と登山ブーム，③交通条件の変化の３つのことについて述